

ビバハウス便り NO.84 求職者支援制度・農業実践科 第1期卒業式

青少年自立支援センター ビバハウス 責任者 安達 俊子

いよいよ今日7月17日、求職者支援制度に基づく、ビバとしてのコース選択で、北海道では他にほとんど例のない『農業実践科』の卒業式を迎えることになった。ビバがこれまでやってきたニート、ひきこもりの若者のみを対象とした制度と違い、雇用保険を現に受給していない求職者すべてを対象とする事業のため、いくつもの困難を乗り越えてのスタートだった。それだけに1期受講生5名全員がそろって今日の日を迎えることが出来ることになり、感無量だ。

このところ、人間界の異常をさも反映したのかとも思われる気象、天候の異常が引き続いている。昨年来これまでに見たことのないような空模様が気になって、私自身、思わず空を見上げる機会が増えた。この12日の夕方の空全体を覆っていた黒い雲。こんな不気味な雲はこれまで見たことがない。新聞の夕刊に眼を通し、やっぱりと思った。九州北部で『これまで体験したことのない』豪雨で、堤防が決壊し、各地で土砂崩れが頻発した。

この荒れた空模様の間を縫って、7月14日（土）札幌のホテルサンプラザで、北海道臨床教育学会の第2回大会が開催された。昨年の日本臨床教育学会の第1回全国大会に引き続き、2回目のシンポジウムでの発言者を要請された。今回は若者に共通する問題と併せ、昨年の3・11が若者たちにどんな強烈な打撃、生きづらさを与えたのかを報告したいと思った。

兵庫県からのビバハウス卒業生36歳のK君は、6月27日、私の母校北星学園大学文学部心理応用コミュニケーション学科の鹿内啓子教授より私が依頼を受け毎年実施している特別講義の授業で、約100名の学生に、『当事者』としての15年にわたる引きこもり体験を語ってくれた。教授は、全学生の感想文を送って下さったので、先生の同意を得て、特に強い印象を受けた10名ほどの文章を彼に読んでもらった。彼は、『僕の話をおんなに真剣に受け止めてもらえるとは全く思っていませんでした。是非すべての学生さんの文章を読ませて下さい』と言って来たので、読んで貰った。ほぼ全ての学生さんたちから、『人の前で、自分の自慢できることでも言うのは勇気がいるのに、良くぞ私たちのために、人に普通ならば隠して置きたい苦しみを語って頂いた。その勇気に感激し、自分自身ももっと真剣に生きなければと思いました。』との感想が寄せられているのを彼は受け止めた。

札幌の大会で、まず初めに私は彼の事例を紹介し、彼の同意を得て、『体験記』の一部を報告した。3・11関連で、福島県郡山市からビバハウス経由で現在北星学園余市高校1年生に在学する2人の男女の生徒について次に紹介した。S君は現地で被災し、本人も父親も仕事を失った。困窮の中にいた彼の状況を知った中学時代の担任が、郡山市のNPOホットスペースRの宗像家子さんに相談し、ビバに来て、北星への進学を実現した。クラス委員長にも選ばれたが、残念ながら2度の謹慎で、現在は実家に帰っている。どれだけ多くの人たちのお陰で進学できたかに1日も早く気が付いて、再起してほしいと日々祈っている。Eさんは3・11の体験を訴え、校内弁論大会で優勝し、全道大会に備えている。